

論文名：困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセス

新潟大学大学院保健学研究科

氏名 柏 美智

---

## 背景と目的

緊急性と正確性が要求される緊張に満ちた医療現場においては、看護業務は多忙を極め、常に医療事故の危険性を孕んでいる。また、看護師同士の人間関係や他職種との連携、患者と家族へのケアという点においても困難を生じる可能性があり、チーム内の相互関係の態様によっては、看護師の離職につながったり患者のケアの質が左右されることもある。このような困難に直面した看護チームが、困難に耐える抵抗性や弾力性を保って回復していくこと、すなわちレジリエンスを備えることは重要と思われる。レジリエンスとは、破損したり亀裂したりせずに跳ね返したり回復するというストレスに耐える物理的な物質の考え方に由来する概念であり、現在では、危機や困難からの「回復力もしくは復元力」として、個人や集団にも適用されている。近年は、チームのレジリエンスを時間的経過の中で捉えることの必要性が指摘されているが、困難に陥った看護チームが時間的経過の中でどのようにレジリエンスを表出して回復のプロセスをたどるのかについて言及した報告は見られない。看護チームがレジリエンスによって回復する態様に注目して、そのプロセスを記述することは、チームの困難からの回復への示唆を得て、患者ケアの質の維持および向上と、より良いチームづくりのために寄与すると考える。

本研究においては、困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスを記述することを目的とする。

## 方法

参加者は、看護師経験年数 11 か月から 38 年を有する一般病棟に勤務する常勤看護師であり、男性 4 名、女性 16 名の合計 20 名である。1 人 1 回、40～90 分（平均 60 分）の半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法に基づいて分析した。分析テーマと分析焦点者に関連した具体例に着目し、その具体例が分析焦点者にとってどのような意味を持つのかを考え概念を命名した。他の類似例、対極例、概念間の関係を検討しながら、カテゴリーを生成し、チーム回復のプロセスをストーリーラインとして記した。

なお、本研究は、新潟大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2015-2638）。

## 結果

困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスの始まりは、【混迷】という困難を抱えたチームの態様の表出であり、その契機となった出来事は、対人関係、インシデント、医療事故など、いくつかの出来事が契機となっていたが、看護チ

## 【別紙2】

ームのレジリエンス表出による回復のプロセスは、5つの局面をたどったと解釈された。

【混迷】の局面は、個々の看護師の相互関係が緊迫し、チームとしての機能が失われかけた状態である。しかし、個々の看護師は粘り強く耐えてケアを継続する。

【模索】の局面は、混迷と停滞の中で、少しずつ頼り頼られる者としての相互関係を形成し始め、手探りしながらチーム回復への一步を踏み出そうとする局面である。

【醸成】の局面は、チームは相手の立場に立って考える柔和さを取り戻し、互いを認め合いながら、患者の看護を共に行うチームとしての態様を築いていく局面である。

【強化】の局面は、個々の看護師の関係が、共にチームを回復していこうとする意識の高まりのもとで、一つの力として凝集されていく局面である。回復に向けて立ち直りの態様を示す。

【変容】の局面は、チームとしての機能を回復し、目標達成のための協働・連携による日常を創るときであり、変化・成長したチームの態様が現れる局面である。

これら5局面は、時間的経過の中で一進一退という感覚を伴いながら、チームの適応的な相互作用を高めて螺旋を描くように回復していくプロセスとして表象された。

### 考察

困難に陥った一般病棟の看護チームがレジリエンスを表出して回復に至るプロセスは、【混迷】【模索】【醸成】【強化】【変容】という局面をたどると考えられた。そして、困難に陥ったチームがチームとしての機能を失いかげながらも、耐えて力を蓄え、回復していくプロセスにおいては、とりわけ、【醸成】における〔対話の成立〕の有無がその後の【変容】にまでつながる契機となると考察された。また、このプロセスにおいて、省察の場があること、つながりを求めること、経験知を蓄積していくことの重要性が示唆された。

本成果は、個々の看護師の語りによる知見ではあるが、今まさに困難を経験しているチームにとっては、チームがたどる回復の見透しを考え、チームとしての現在の局面を確認するための道標になり、実践への応用が期待できると思われる。